

2022年度大会共通論題報告

報告(1)

^{イエケ}大モンゴル^{ウルス}国からみたヨーロッパ

宮 紀 子

『西洋史研究』新輯第52号(2023)抜刷

II 報告（1）

イェケ ウルス 大モンゴル国からみたヨーロッパ

宮 紀 子

はじめに——クビライ以前とクビライ以後

13世紀初頭、ユーラシア東北部に登場した大モンゴル国^{イェケ ウルス}は、「日の登る処より日の没する処まで、諸邦はみなわれらのもの」とのことばどおり、破竹の勢いで版図を拡大していった。それを支えたのは、統率のとれた騎馬隊、弓射の術といった固有の軍事力だけではない。つとにチンギス・カンことテムジンの時代からモンゴルは、巨大な経済圏の出現を願うムスリムやウイグルの商人たちと手を結び、莫大な資金を投資して諜報活動・交渉代行・物資調達などの面で協力を得ていた。また、制圧した地域の王族との婚姻による血の融合、当該地域社会の伝統（慣習）・文化・宗教の尊重、城攻め用の武器をはじめ東西の最新技術を導入・改良する柔軟さ、そのための技術者や医薬・天文に長けた学者たちの確保・優遇なども大きな要因である。

チンギス・カン、それに続くオゴデイ、グユク、モンケの時代は、既に手中に収めた地域——北中国・中央アジア・イラン方面に対して、軍事・経済の両面から中央集権型の支配を行った。大モンゴル国の遠征軍は諸王家が供出する兵で構成され、接收した地域はそれぞれの功績に照らして公平に分配される——要するにみなで享受するのが原則だった。したがって、この三つの管区に行政府⁽¹⁾を設置し、モンゴル高原の大宮帳から腹心の財務官僚を差し向け、チンギス・カンの四嫡子のジョチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイ以下（庶子、弟、^{ベキ グレゲン} 公主・駙馬等の）諸王家の所領・権益を守る代官たちの長となして、戸籍調査・徴税等の業務を統括させていた。同様に、大宮帳が任命した腹心の官人（都元帥）⁽²⁾率いる頭哨の駐屯軍は、版図の最前線で遠征のための情報収集、外交の窓口、防衛等の重要な任務を担いつつ、駅伝の整備・管理や行政府の業務の輔佐も行った。ただじっさいには、オゴデイ擁立に大きく貢献したチャガタイ家が中央アジアの管区に覆いかぶさった。また新たな管区となるはずだったキプチャク草原からロシア方面にかけての広大な領域も、オゴデイの死とその後の長期混乱に乗じて、フランク諸国（ヨーロッパ）遠征のための大軍という強大な兵権をそのまま握り続けたパトゥが、モンケ擁立と引き換えにジョチ家の所有としてしまったのだが。

即位後まもなくモンケは、あらためて「世界を切り開く」ために、（しかし第二のパトゥを産むことのないよう）同腹弟のうち、大興安嶺の南、漠地および高麗との境

界に根拠地をもつコンギラト駙馬家から正妃チャブイを娶っていたクビライを東方に差し向けた。西方には、父トルイの^{オルド}宮帳からネストリウス派キリスト教信奉者プレスター・ジョンとして名高いケレイト王国オン・カンの孫娘トクズを収継、正妃として迎えていたフレグを振り分けた⁽³⁾。明らかにゲルジア、キリキア、ビザンツをはじめ、フランク諸国を見据えてのことだった（婚姻関係が兄弟の運命、そのごの「世界史」の展開を決めたのである）。

ところが、イスマール派、アッパース朝を次々と倒して、マムルーク朝制圧をめざし準備をはじめたフレグ軍に比し、クビライは大理国接收後、すぐに南宋進攻に着手しようとはしなかった。のみならず漢地経営におけるクビライの不正——カネは血よりも濃かった——も発覚したため、モンケは自らも南宋遠征に乗り出さざるを得なくなる。そしてクビライに預けた大軍を回収する前に、四川の陣中で急逝してしまった。モンゴル高原で留守を預かり、ジョチ家の支持を得ていた同腹の末弟アrikブケが正統なカアンとみなされたが、クビライはお手盛りの^{クリルク}聚会を開催し、カアンとして並び立った。対南宋戦の主力軍と巨額の蓄財によるクーデタ政権だった。

クビライは、アrikブケとジョチ家への対抗手段として、同じく非合法にチャガタイ家の当主となったアルグ、ホラーサーンの領有権を巡りジョチ家と対立していたフレグと手を結び、三人で北中国、中央アジア、イラン方面の行政府を一つずつ接收した。チンギス・カン以来のモンゴル高原からの中央集権型支配、大モンゴル国全域の実効支配を放棄し、ロシア方面のジョチ・ウルス、中央アジアのチャガタイ・ウルス、中東方面のフレグ・ウルスをユーラシアの東端から間接統治する道を選んだのである。それに伴い、首都をモンゴル高原から大都（現在の北京）と上都（内モンゴル自治区正藍旗）に移した（この選択が世界史における「中国」の浮上をもたらした）。

アrikブケを打破して唯一のカアンとなったクビライは、大モンゴル国という諸連邦の宗主であり続けるために、まずは自らの「カアンのウルス（大元ウルス）」の領土の拡大——南宋接收に邁進した。かつて反抗しつづけていた高麗はクビライ家から公主を娶る駙馬国となることを願い出るなど、背後の不安は消えていた。南宋は、国家収入の重要項目となる金・銀・塩・茶等を産出し、重要な貿易港を複数擁していた。接收後は、資金を投じて青花磁器や金襴緞子など高額輸出商品の開発に力を入れている。さらに日本や東南アジアにも食指を伸ばした。これらの地域の確保によって、アフロ・ユーラシアの「陸・海・水」の交通網をより安全にしようとしたのである。

かたやフランク諸国やマムルーク朝への侵攻は、ジョチ・ウルスとフレグ・ウルスをさらに巨大化させ、かつ領地をめぐって争いの絶えない両者の間に新たな火種を用意することを意味する。大元ウルスに直接の利益はない。クビライ自身は消極的となった。軍事展開によってこれらの地域を実効支配せずとも、大モンゴル国の経済網

に連結、組み込めれば充分と考えた。そこで、フランク諸国とちよくせつ折衝するフレグ・ウルスに対し、友好的な態度を以てあたるよう、指示したのである。クビライ以前とクビライ以後では、モンゴルのフランク諸国に対する態度は、大きく変化した。この点を踏まえておく必要がある。

1. 漢文資料の限界

大元ウルス治下の漢文資料は膨大にあり、ブラーノ・カルピニのジョヴァンニヤルブルクのギヨーム等、フランク諸国の外交使節団や商人たちが遺した報告書の信憑性の指標的役割を果たし、記事の補正にも役立っている。そのいっぽう、漢文記録におけるフランク諸国の情報は、外交使節団の往来も含め、フレグ・ウルスのペルシア語資料に比して圧倒的に少なく、内容自体も正確とはいえないものである。この四半世紀で資料状況が大きく変化したにも拘らず、ことフランク諸国に関する限り全く増加しなかった。大都に長期滞在し其処に骨を埋めたモンテ・コルヴィーノのジョヴァンニ、かれが建てた教会、かれがモンゴル語訳した『新訳聖書』及び『詩編』、泉州の分教会について言及する資料も見つかっていない。結局今までに知られているのは、以下のA～E僅か5つの事項に過ぎない。しかもCの一部分（下線部）とEは重なる⁽⁴⁾。

A 劉郁「西使記」（1263年書。王恽『秋澗先生大全文集』卷九十四「玉堂嘉話（二）」収録）⁽⁵⁾

1252年、モンケ・カアンの同腹弟フレグは諸軍を統括し、^{ジャルリク}聖旨を奉じて征西して以来、六年のあいだに何万里も先に疆域を切り開いた。1259年2月13日、常德は駅伝を利用して西のかたフレグ大王のもとを目指すべく、カラコルムを出立した……^{バグダード}報達まで3300km以上の距離があるが、当該国の西は[地中海]海である。[地中海]の西には^{フランク}富浪国があり、御婦人方の衣服・被り物は観世音菩薩のようで、男子の胡服も美しい。寝る時も衣を脱がず、夫婦であっても別の場所で休むとか。

B 王恽『中堂事記』中卷（1287年。『秋澗先生大全文集』卷八十一収録）

1261年6月6日、^{フアラング}発郎国が人を遣わして^{リネン?}草織の衣服などの品々を献上に来た。使者たちの話では、「本土から開平府（上都）に到着するまで三年以上かかってしまった。当該の国は「^{アラビア}回紇」⁽⁶⁾の極西辺境にあり、常に昼で夜にならず、野鼠が穴を出る頃が黄昏である。人が死ぬと大勢が誠心誠意を尽くして天を呼び、^{はえ}魁った者もいる。^{ふよ}蠅や蚋は悉く木から湧いて出る。ご婦人方はひじょうに艶美で、男子は大抵が金髪碧眼である。通過してきた道程には二つの海があり、一つは一箇月以上、一つは満一箇月かかることから大きさを推し量ることができよう。船

艘は大きく、五千人を載せられる」とのことだ。かれらが献上した醜罍さかづきは、おそらく海鳥の大きな卵を二つに割って造ったもので、冷えた美酒を注いでもたちまち温まってしまふ。まさか、巷間にいうところの「温涼盞ケンシク（温めるも冷やすも意のままの盞ケンシク）なる宝物でもあるまいが、上様（クビライ）は、かれらが遠路はるばる参上したことを嘉よみされて、返礼として黄金・絹地等を手厚く賜わった。

C 朱徳潤「異域説」（『存復齋文集』卷五収録）

1347年の冬、京口（いまの江蘇省鎮江）乾元宮の宝俊齋に寄寓していた折りに、たまたま〔近隣の〕毘陵郡（江蘇省武進）の監たるヨカナン（ネストリウス派キリスト教徒）、平陽（浙江省）の知事のサルジウダイの御二方が一緒に来訪なされ、問わず語りに「仁宗アユルバルワダの御世1314～18年に、われわれは輪班ケンシクのケプテウル宿衛としてカアンのおそばにお仕えさせていただいていたが、そのころ仏羅国フランクから外交使節（ローマ教皇庁から派遣されたペルージャのアンドレア修道士の一行？）が来朝し、提出した詞状には『当該地域は日の没する処に当たり、土地は甚だ広く72人の酋長がいる。全周約22～27.6kmの水銀の海があり、まず海沿い約5.5kmに互って坑井を数十箇所掘削、それから鷹狩担当の屈強の者・駿馬を集めて、人馬ともに護身の金箔を貼りつけ、海沿いを連なり行かしめる。日光が燦々と照らすと水銀が潮のように沸き立ち、迫り来る勢いはネバネバの風呂敷のよう。人々は即座に馬の向きを返して疾駆し、水銀が背後から追う。反応がちよつとでも緩慢だと人馬もろとも溺れる。逃げが速ければ、水銀の勢いは次第に遠く弱まるが、また襲いかかってくる。坑井に水銀が蓄積するので、引いている隙に採取に戻る。香草を用いて煮沸すれば、銀塊が得られる。当地では、毛を繕り合せて布をつくることができ、梭福と呼ばれているが、密昔丹の葉で深緑に染める。洗っても色落ちしない。ほかに毛氈や錦の敷物も生産している』とあった。恵宗（順帝）トゴンテムルの御世の1342年にも、〔首を擡げた状態で耳からの〕高さが九尺余（大元時代の官尺なら3.15m以上。Eとの整合性からすれば、誇大化して言ったものか、旧南宋の伝統尺で2.7m以上ということか）で、尾が七尺（2.1m以上）垂れ下がる原地産の黒馬を献上した。使節は4年かけて乞失密に到達し、さらに4年をかけて漠地に到った。七たび海を越えてようやく上都（夏の首都）に到着したらしい」と、ヨカナンとサルジウダイの御兩人はもう出立されてしまわれたが、わたくし朱徳潤は、かれらの話を書き留め記録しておくことにする。

D 張昱「天馬の歌：天曆年間（1328-30）の貢物」（『可問老人集』卷一収録）⁽⁷⁾

天馬フランク弗郎国よ自り来たる、足下に風雲生じるや倏忽しやくこつ。

司天は「房星せいせいを失す」を上奏し、海辺に蛟龍の骨を産じ得たりと。

軒然として卓立すれば八尺（約2.8m）の高さ、衆馬は首を俛れて徒勞を差す。

色は北方に応じて「水徳」に鍾り、満身の日彩に烏翎の黒。

縦に行き義和の轡を受けざるも、王良を使って靦靦を馭せしむるを肯んず。

黄絲の絡頭兩馬の牽、金鐙は双び垂れ玉もて鞭となす。

寵榮の日に賜わりし三品の祿は、衛の鶴の空しく軒に乗るに比せず。

大国懐柔すれば小国は貢し、君王一顧すれば軽を重と為す。

学士は前みて陳す「天馬の歌」、詞人は遠くより獻ず「河清の頌」。

鸞旂の属車は相後先し、之を受け之を却くは俱に伝う可し。

普天率土は尽く臣妾、聖主符を同にすること千万年。

房星：中国二十八宿の一つ房宿六星の内、天上の車駕・厩舎を管理するとされる四つの星（天駟）。

大元時代以前は、房星の天馬の精が大地に降臨して生まれたのが中央アジア大宛国の汗血馬と考えられていた。水徳：王朝交代を五行相克の思想に基づき各々固有の徳運を以って説明しようとするもの。義和：太陽の御者。王良：古の名御者で、死後に「天駟」の傍らの星に変じたとされる。靦靦：車のながえと馬の頸木をむすぶ楔。衛鶴空乗軒：『春秋左氏伝』「閔公二年（660B.C.）。衛の懿公は鶴を過剰に愛好し、大夫の車に乗せたりしていたため、狄が戦争を仕掛けた際に、甲冑を配給された国人たちが「禄位をもらっている鶴に戦わせろ」と主張して動かなかった故事。

鸞旂：カアン（周）の御車の上に建てる大旗。

E 周伯琦「天馬の行：カアンの“制詔”に応じて製作した楽府。序文有り」（『近光集』巻二収録）

至正二年の壬午の歳七月十有八日（1342年8月19日）に、西域の仏郎国フランクが使節を派遣してきて馬一匹を献上した。[耳までの]高さは八尺三寸（約2.9m）、[鼻端から尾根までの]身丈はその1.5倍、色は漆黒、後脚は二つとも蹠（蹄冠・繫の辺り）が白く、彎曲する項に高く擡げた首、神業めいた俊逸さは超度級、他の西域馬で称賛してよいものと比較してみると、いずれも[天馬の]肩甲骨の下である。金の轡たづなに勒くつわを重ね、制御して牽く者はその国の人で、金髮碧眼、体の線に沿った二色（上下異なる色）の衣服を着用していた。ことばが通じないので、意を以って伝えた。凡そ七たび海洋を渡って⁽⁸⁾、始めて中国に達したとのこと。

この日は、明るく澄みきった天気だった。丞相・大臣が献上品について奏上したところ、上様は慈仁殿にお出ましになり、間近で御覧になるや感心して褒め称え、結果、天閑（御厩戸）にて繫養するようお命じになり、粟粒・酒湏で飼育させた。そのうえ、翰林学士承旨の峻峻に救命を下して、絵画に巧みな者に命じて描写させ、それから翰林院直学士の揭傒斯が賛を付した。有国以来、出現したことがないだろう。いにしえの所謂「天馬」に近いものか、詔を承け、詩を賦して描かれた図の巻頭に題すこととなった。臣周伯琦が謹んで詩を献呈して謳う [以下略]

・ 欧陽玄「天馬の頌」（『圭齋文集』 卷一収録）

至正二年壬午の歳の七月十八日丁亥（1342年8月19日）に、皇帝が慈仁殿にお出ましになられ、^{フランク}弘郎国は天馬を献上した。二十一日庚寅、龍光殿から周郎に勅命を下し、その姿形を図に描かせた。二十三日壬辰に絵図を進呈したところ、翰林学士承旨の^{キキ}巉巉が聖旨を伝え、揭傒斯に命じてこの絵図に賛を付けさせたのだった。臣たる私が思うに、漢の武帝は兵二十万を出立させて、わずかに大宛産の馬数匹を得ただけだった。ところが今、一兵も煩わせることなく天馬が来たったのは、ひとえにカアン^{カアン}の文治教化が行き渡っているからだろう。臣たる私は^{にぶく}驚劣だが、敢えて拜手・稽首せずに「頌」を献上して謳う〔以下略〕

・ 揭傒斯『掲文安公文集』 卷十四「天馬の賛」

^{カアン}皇帝が即位されて十年目の七月十八日（1342年8月19日）に、^{フランク}弘郎国が天馬——身丈は一丈一尺三寸有奇（約4m）、背からの高さは六尺四寸有奇（2.25m以上）、耳からの高さは八尺有二寸（2.87m）を献上した。廿有一日に、臣下の周朗に勅命を下して姿形を図に描かせた。廿有三日に、揭傒斯に詔を下して絵図に賛を附させた。賛に謳う〔以下略〕

・ 呉師道「天馬の賛、並びに序」（『呉正伝先生集』 卷十一収録）

至正二年秋七月（1342年8月）、上様が灤京（上都）にご滞在中、^{フランク}弘郎国が馬を献上に来た。身丈は一丈一尺有三寸（約4m）、背からの高さは六尺四寸（約2.25m）、耳からの高さは更にその三分の一を足した寸法だ。身体は真っ黒で、後ろの二蹄が^{まぐさ}白。芻と粟を通常の二倍、間間に粟粒・酒漚を食べる。珍しき偉容の驍駿で、正真正銘の「神物」（神の御業がなせる傑作）である。弘郎は西海の西にあり、上都から数万里、凡そ七たび巨洋を渡り、四年を歴してようやく到着する。上様は慈仁殿にお出ましになって馬を受け取り、翌月、これに騎乗して大都に帰還した。既に画工に勅命を下して絵図を製作せしめ、さらに文学担当の臣僚に命じて賛を附させた。臣たる某は^{それがし}国子監の一員として、盛事を目睹したので、謹しんで百拜・稽首して賛して謳う。〔以下略〕

・ 許有壬「“制詔” に応じて製作した天馬の歌」（『至正集』 卷十収録）

^{フランク}弘郎国は^{オグズ}月窟の西に在り、^{ウイグル}八尺の真龍は維繫に入る。

七たび大海を逾え四年を^{けみ}閱し、灤京に今日^{はじ}初めて朝天す。

煩わず翦^{くろ}髪し光は目を奪う、正色は瑞を呈し吾が^{くろ}玄に符す。

鳳の髻と龍の臆と渴鳥の首、^{しらたま}四蹄は玉が後で^{くろいし}髻が其の前なり。

九重は喜びて見ゆ遠人の格、一時して便ち^{つたえ}勅す良工の伝。

玉の鞍と^{したぐら}錦の鞆と黄金の勒、瞬息に殊恩は華飾を備う。

天成の異質は自ら^{くつわ}蔵し難し、志は君知に在りて物には在らず。

方に今天下は有道の時、絶塵詎ぞ敢えて其の力を称えん。

臣才めて驚くを罷め亦た自ら知る、共に安輿に服い𩇑軼すること無し。

維繫：繩を受ける。掛け詞。朝天：カアンに謁見。翦払：下拜。渴鳥：曲筒状の汲水器。絶塵：塵埃が遙か遠くに置き去りにされるがごとく超高速で奔走。𩇑軼：顛覆や逸脱。

- ・陳基『夷白齋稿』外集「張彦輔の『弘郎の馬を描く図』に跋を付す」

至正壬午（1342年）、私が上都に身を寄せていた際に、弘郎の馬がちょうど到着した。その龍の鬃と鳳の臆をもち磊落たる偉容の“神駿”は天廄（皇帝の厩）に入ってカアンの車駕用とされたうえで、図が描かれた。好事家たちに伝わるのは、永嘉（いまの浙江省温州市）出身の周朗と〔モンゴル出身で太一教の〕道士張彦輔の作品、いずれも皇室御物の官ということで、一時期、名声を博した。しかるに周朗の作品は識者（批評家）たちに既に定評があるが、張彦輔の場合、“作法”を取り払ったすえに自ら新意を出して、羈絆を受けず、ために奮躍疾走する抜きん出た迫力が筆と紙の間に現れる作品が、往往にしてとりわけ人々に愛好珍重される。かくて四方万里にいたるまで、宮中の天馬が知られることになったのだ。

この絵巻こそかれの作品群のなかで最も満足のゆく出来映えのものであったが、僅か八、九年で、再び顧瑛（顧德輝。字は仲瑛）氏のところにおいて見ることとなった⁽⁹⁾。往昔を追懐すれば、まことに慨嘆いや増すばかり。韓文公（韓愈）に「千里の馬は常に有り、伯樂は常には有らず」という説があるが、ああ、世間にどうして伯樂がいなくてだけであるものか。張彦輔の絵図のように駿馬を描写するものを入手したいと思っても、二度と手に入れることはできないのだ。顧瑛は家宝とせず〔愛玩／蔵〕してよいものか。

- ・『元史』卷四十「順帝本紀三」〔至正二年秋七月〕

この月に、弘郎国が異馬を買した、身丈は一丈一尺三寸（約4m）、背高は六尺四寸（約2.25m）、身体は真っ黒で、後ろの二蹄は両方とも白かった。

B～Dのフランク諸国からの使節団の記事は、中国歴代正史に範をとって編纂された『元史』の「本紀」（編年体）の当該年月日には収録されていない。それどころか、『元史』の「本紀」において、フランク諸国との往来は、マリニョッリのジョヴァンニの記録と合致することで有名なE以外、全く記されることがない。一体、何故なのか。

『元史』は、大明の洪武帝朱元璋の命令により、王朝の交替を“中華”世界に宣言せんがために⁽¹⁰⁾、1369年に188日、追加作業として翌年に143日の二回に分けて、きわめて短期間のうちに編纂されたものである。大都の宮廷図書館や各官庁には、漢籍以外にもモンゴル語、ペルシア語、アラビア語等、多くの言語で書かれた書籍、公文書等の資料が大量に集積されていた。しかし『元史』の編纂官のなかに、大元ウルス

朝廷の中枢部に勤務していた者はひとりもおらず、「山林遺逸の士」がほとんどで、利用し得る材料の概容を把握している者も、多言語を自在に扱える者もいなかった。したがって、それらが活用されることはなかった。編纂官たちは倉卒に作業を行い、「本紀」については、太祖チンギス・カンから寧宗イリンジバルまでの十三朝の『実録』を、適宜抜粋してゆく作業に終始した（そのおかげで、『実録』の大まかな姿が窺えるが、朱元璋にとって不都合な記事や編纂官が理解不能な事柄は、削除の対象となった可能性がある）。当然のことながら、編纂開始の時点で存命中の恵宗トゴンテムルの『実録』は編纂されていなかったため、洪武帝の文官たちが、トゴンテムルの治世に朝廷で編まれないいくつかの政書を基軸にして、個人の詩文集・筆記、碑石の拓本、野史等を自力で収集せざるを得なかった。Eの『元史』の「本紀」のフランク国から送られた天馬についての言及は、上掲の各詩文集の記事に基づいたが故なのだ。

『実録』は、「本紀」、「事目（≒年表）」、「聖訓／制誥録」の三つの部分から構成される。^{ケシク}宿衛の書記（漢語でいえば給事中・起居注）がカアンの一挙手一投足に近い言動をウイグル文字モンゴル語で書き留めた日録^{ビチクチ}（¹¹）、カアンの死後に編まれ ^{イエクトブチヤン}Yeke-Tobčiyān『大史冊』と呼ばれる国史（^{アルタンダブテル}Altan-dabter『金冊』、^{イエケジャサク}Niuča-tobčiyān『秘史』ともいい、史伝と系譜で構成される）、^{ニウチャトブチヤン}Yeke-jasaq『大法令』（^{クタドックビヨク}Qutaduy-bilig 聖訓）を基本材料としている（『大史冊』には、前の治世を否定したいカアンの指示、編纂官たちの忖度による削除がある。たとえば、Dの記事は自身の徳を誇りたい恵宗トゴンテムルにとっては、フランクの駿馬の献上に前例があり、しかも二頭立てだったという都合の悪い記事である。またクーデタによってカアンとなったクビライは、根本資料たるチンギス・カン～モンケまでのモンゴル語日録を入手できないまま、諸王に頒布されていた資料や古老・旧臣等への聞き取り等によって、グユクとモンケの治世の国史を編纂させるしか術がなかった）。ただ、これらのモンゴル語の記録のうち『大法令』以外は、原則として^{イエケクリルタ}大聚会に参加を認められているモンゴル諸王、駙馬、テュルク・モンゴル貴族（≒譜代大名）等しか見ることができなかった。したがって、閲覧の資格を有し且つ漢語を解する翰林国史院のモンゴルないしウイグルの高官らが、『実録』に掲載する記事を取捨選択して、口頭で翻訳^{キタイ}（^{ダイキムジュシェングルン}旧大金女真国領）^{マンジ}（旧南宋領）の官僚が文語に整えた（補足資料として、中書省左司の吏・礼房に設置されている史典編録局の「時政記」や翻訳・整理済みの公文書等も使用された）。幸い潘昂霄の『金石例』巻十には、『実録』に採録すべき27項目が載っている。そのうち外国に関わるものは以下の3項目である。

・「外国の来賀」（第3条）

「賀」の後に引見した諸国の使者を順番どおり列挙する。恒例の儀礼のような場合

には、もし一箇国だけのことなら、「某国はその某官の臣某を遣わして来賀せしむ」と述べ、参内して暇乞いした日にちを月日どおりに記す。

・「征伐・收撫」（第23条）

諸国を平定したような場合、最初は「某人に命じ師を率い某を伐たしむ」と記し、そのごの次第を悉く記してゆき、国都に入るに至って「某国、平らぐ」と記し、（その）後に既行の事実を併記する。反叛があった場合には「何地の某人反す。某人に命じて師を率い之を討たしむ」と記し、そのごの次第を悉く記してゆき、賊が破敗し尽くすに至って「賊、平らぐ」と記す。上が親征した場合も同様である。

・「外国の君長」（第24条）

外国が帰順していない時には、「某国の主の某、^ゆ殂く」と記し、立てば「某国の主の某、立つ」と記す。朝廷によって立てられた者は「某国の王の某、卒す」、某人を立て某国の王と為すと記す。まだ王に封じられていない者は「世子」と記す。

ルーシと異なり、征伐・收撫されることのなかったフランク諸国が『実録』に記載される可能性は、「来賀」と「君長」の項目しかなかった。ところが『元史』の「本紀」において「来賀」ないし「来朝」、「来貢」の対象となっているのは、近隣の高麗や安南、爪哇等東南アジア諸国のほか、せいぜいインド洋の俱藍、馬八兒までである⁽¹²⁾。これが、『実録』の漢児・蛮子の編纂官の選択によるものなのか、『元史』の編纂官の価値観の反映ないし洪武帝の方針に従った削除なのかは、いまのところ判別しがたい。

いっぽう、『元史』の本紀以外で、フランク諸国について触れられる可能性のあった「地理志」や「外国伝」は、概ね『（皇朝）経世大典』880巻に依拠している。『経世大典』とは、文宗トクテムルの即位を記念し、1329年10月から1331年6月まで1年半余りのうちに、『唐会要』や『宋会要』に倣う形式で編纂された“政書”である。帝訓・帝制・帝系を冒頭に置き、六典——治典（官制≒吏）、賦典（財政・地理・運送等≒工）、礼典（朝儀・祭祀・学校・芸文・外交等）、政典（軍事遠征・叛乱等≒兵）、憲典（法律≒刑）、工典（土木・製造）の大分類のもと、項目別に整理・解説する。

トクテムルの^{ジャルリク}聖旨により、奎章閣（トクテムルの取り巻きで形成された文化サロン）と翰林国史院の漢児・蛮子の官僚が中心となって各官庁に内容別・年代別に分類・蓄積されている膨大な文書ファイルをもとに編纂したが、作業が捗らず、途中からモンゴル語資料の翻訳のためにウイグル官僚の協力を仰いだ。ただ帝室の系譜等の機密に属する内容を含む『大史冊』の借用が許可されなかったこと、チャガタイ・ウルス、フレグ・ウルス、ジョチ・ウルスを描く方格の「地理図」⁽¹³⁾の地名の少なさに象徴されるように、この大部の漢文の編纂物はあくまでも“外廷”の漢児・蛮子の官僚向

けであり、これによって大モンゴル国の諸制度の核心部分に迫ることは困難だった。ましてアラビア語やペルシア語のみならず、ラテン語、タイ語等の多様な言語で書かれた国書については（仮に閲覧が許されたとして）、それらに添付された既存のモンゴル語訳を用いるにしても、さらに漢訳が必要で、時間的にも不可能だった。じっさい《朝貢》の項目には、“案牘そなの具わらざれば、書に備ととのうるを得ず、此の篇を立て以って考補を俟つ”⁽¹⁴⁾との断り書きが附されている（外交使節団の接待や調書・写真がわりの彩色絵図の作製は“会同館”なる部局が掌っており⁽¹⁵⁾、翰林国史院には当該の職を兼任している官員もいたのだが）、また《朝貢》と対になる《遣使》の項目も立てられており、“有司（官庁）の存牘おほを彙めた”というが、『元史』の「志」では二項目とも採用されていない。“声教が〔広く被おほう／被おほひ化する〕”の慣用句のように、“朝貢”国の多寡・遠近が皇帝の徳恩の指標とされており、大明が劣ってしまうためだ⁽¹⁶⁾。

なお、『十三朝実録』は『元史』の編纂後に後世の検証を阻むためか行方不明となり、『(皇朝)経世大典』も『永楽大典』の編纂後、散逸してしまった。こんにち『永楽大典』自体も大部分が散逸してしまっている。そこから拾い集めた『経世大典』の逸文は、『元史』が伝えない貴重な記事も含むが、“隔靴搔痒”としかいいようがない。

2. フレグ・ウルスにおける世界の歴史地理と文化の把握

では、カンからフランク諸国との直接交渉を委任されていたフレグ・ウルスの正史では、どの程度把握、言及されているのか。

Gāmi' al-Tawārīḥ 『集史』は、チンギス・カン即位100周年、フレグ・ウルス建国50周年を記念すべく、1300～10年頃に編纂された。アバカ、アルグン、ガザンとオルジェイトゥ、アブー・サイドの4世代にわたる君主たちに侍医兼財務省長官として仕えたラシードウッディーン・ハマダーニーが編纂の総責任者をつとめた。ご進講の教材としても使用するため、重要な場面には挿絵が附された（大聚会・大宴会等の制度、慣習、モンゴル騎兵の装備等を目で理解・確認するのに役立つ⁽¹⁷⁾）。ペルシア語版に加え、より多くの読者を獲得すべくアラビア語版も作成された。最終的には以下の四部構成になったとされる。

第一部：『ガザンの吉祥なる歴史』

①テュルク・モンゴル諸部族志、②モンゴル歴代君主たちの本紀（〔I〕伝説のアランゴアに始まる列祖、チンギス・カン、〔II〕カンたちの本紀（オゴデイ、ジョチ、チャガタイ、トルイ、グユク、モンケ、クビライ〔附アリクブケ〕、テムル）、③フレグ・ウルスの君主たちの本紀（フレグ、アバカ、テグデル、アルグン、ガイハトゥウ、ガザン、オルジェイトゥ）で構成される。ウイグル文字モンゴル語の『金冊』^{アルタンデブテル}（歴

代の『系譜』、^{イェクトブチヤン}『大史冊』、チングス・カンの^{クトドックビリク}『福德智慧』、歴代カアンの『聖訓／制詰録』)を骨格とし、アラールウッディーン・アターマリク・ジュヴァイニーの *Tārīh-i Ġahān-guṣā'ī* 『世界を開く者の歴史』、マラーガの朝廷図書館やタブリーズの学術区に集積されたさまざまな言語の文献、君主ガザンの口述、大元ウルスから来たボロト丞相や外交使節団の情報で肉付けされる。各本紀に挟まれる同時代史——「列国伝」は、1306年時点で大モンゴルに接収されていた地域(ホラズム・シャー朝、アッパース朝、ルーム・セルジューク朝、キプチャク草原、大金女真国、南宋等)のほか、まもなく接収するつもりアイユーブ／マムルーク朝も対象とし、そこで十字軍とビザンツ帝国に多少言及している。しかしフランク諸国は「列国伝」に含まれない。

第二部：『オルジェイトウ・スルタン史』(闕)と『歴史精華』

ラシードウッディーンの部下のアブールカースィム・カーシャーニーの貢献度が大きかったとされ、じっさい、かれの手になる同名書が伝来する。『歴史精華』(『万国史』)は、天地創造以来の世界史で、イラン古代・イスラーム、オグズ、中国、ユダヤ、フランク、インド等の諸史からなるが、各言語の翻訳官、諸国の使節団や商人たち情報提供者の協力があってこそその成果である。

ラシードウッディーンは、その名が1302年の教皇ボニファチウス八世宛てのガザン・カンの国書(外交書簡)の裏面に記されるように、フランク諸国との外交交渉に直接深く関わっており、情報収集を怠らなかった。フレグ・ウルスと同盟関係にあり航行の保護警備や交易促進に貢献していたピーサの君主ジョロ勇将^{パトル}、ジェノヴァの商家出身でアルゲン・カンの^{コルチ}弓箭士だったブスカレッロ、クビライ・カアンの指示のもとフレグ・ウルスへ赴き1287年にローマやパリを歴訪したラッバン・パール・サウマ等から得た地理や政治の情報のいちぶは、「フランク史」に反映されている⁽¹⁸⁾。

「フランク史」は、上巻でアダムの出現の始めから^{メシヤ}救世主キリストの誕生まで(全4章)、下巻で1306年まで(全4章)を扱う。下巻の構成は①キリスト教徒諸派の信仰、②地理からみたアルメニア諸国の疆域、③フランク諸国およびその海・島に関する知識、各地域の特性と君主たちの銘、④フランクの君主たちすなわち歴代の教皇と皇帝の事蹟の銘(ポーランドでドミニコ会修道士として活動し、1279年頃に没したチェコのオパヴァ出身のマルティンの『教皇と皇帝の年代記』の抄訳。ラシードウッディーン等が、教皇ベネディクトゥス十一世、皇帝アルブレヒト一世までの情報を補完、肖像画は向って右を尊ぶモンゴルの習俗に従って配列【図1】)、である。ここでは③が最も貴重な資料となる⁽¹⁹⁾。

まず、「フランクの指導者・君主たちの序列」として、最上位：教皇(「教父たちの教父」、^{メシヤ}「救世主の代理」)、第2位：皇帝(「エムベロール」、^{スルタン}「国王たちの国王」)。選挙



【図1】 Topkapı Sarayı, Hazine, Nr.1654, fol.312v (K.Jahn, 1977.)

教皇たちの紀年譜 名前と肖像	皇帝たちの紀年譜 名前と肖像
<p>ケレスティヌス5世：本籍はベルージア。教皇の座に6カ月居た。権限によって自身を廃した。</p> <p>ポニファティウス8世：カンパニヤ出身。計9年間、教皇の座で権力を為した。かれの治世にアラゴン王の奪取していたシチリア島が取り戻された。アラゴン王の息子が教皇に服従した。</p> <p>ベネディクトゥス11世：本籍はトレヴィーゾ。教皇の座に坐ること約1年。A.H.705年(1305)の現在、教皇の地位にはかれがいる。</p>	<p>アドルフアス：9年と6カ月、皇帝の座に腰を据えた。シリア郊外の諸都市の奪取およびタブリーズとイランの諸国でのキリスト教会の破壊の報復に、ルーチュエラの都市に住んでいた約25万人のムスリムを殺害した。</p> <p>アダー・アルブルトウス(アルブレヒト1世)：現在、かれが皇帝の宝座に腰を据えている。かれの情況について生じたことは、今後書きとめられるだろう。</p>

制), 第3位: フランス国王 (「君主たちの君主」, 世襲制, 十二名の君主の上にたち, 各君主にはそれぞれ三名の王侯が服属), 第4位: 国王 (「王侯・領主」) と報告する。さらに1289年以降の情報として, 教皇が皇帝の任命に大きな権限をもち, 皇帝は教皇に対して統治権をもたないこと, 教皇から委託された貴顕 (「選帝侯」) 七名——三名

の「^{マール・ハシヤー}司教」(トリヤ、マインツ、ケルンの大司教)、三名の大官人(ライン／バイエルン、ザクセン、ブランデンブルクの侯伯)、一名の^{アミーリ・フズルグ}君主(ボヘミア王)が、フランク諸国の全貴族たちから皇帝の候補者を十人近くにまでしぼり、綿密かつ多角的な調査の上で最終選出者を決定すること、選出者はアレマニア(ゲルマン)の王国→ロンバルディア→ローマの3箇所を巡り、銀、鋼鉄、黄金の冠を戴くが、最終地での奇妙な儀式(教皇が両足で黄金冠を持ちあげて選出者の頭に載せ、教皇がその者の頭・項・背中を踏み渡り馬に騎乗する)が終了してようやく^{カイサル}の称号が付与されること、も述べられる。^{マール・ハシヤー}司教なる用語から、この箇所の情報提供者はネストリウス派キリスト教徒と見てよい。

ヨーロッパの北方では、^{バードシャー}İbarniyā アイルランドと Anglehterre イングランドの両島の君主が ^{バードシャー}Suqūtlāndīyah スコットランドの名で呼ばれ、税はイングランドの^{ロフ}王に与えられること、イングランドの^{バードシャー}君主がフランスの^{ロフ}王に朝貢していること、^{ロフ}Būhīmiyā ボヘミアの君主が sāqā と呼ばれており、^{ロフ}Būlūniyā ポーランドの君主の王国を侵略し、数年に亘り占拠中であること、^{ロフ}Burūsīyah プロシアが胸に黒十字を付けた白い粗末な毛織の衣を纏った信者たち(チュートン騎士団)の国であることにも言及する。北極点に近い ^{ロフ}Savatiyā スウェーデン、^{ロフ}Gütlāndīyah ゴトランド島、^{ロフ}Nürvīgah ノルウェーの各君主国では、オーロラや白夜の現象が見られ、モンゴルの君主たち愛好の“^{ロフ}白い胸の鷹”^{シンコル}を産出することも紹介される。^{ロフ}Davāsiyā デンマークの^{ロフ}王の国には金・銀・宝石の鉱山があるという。そのいっぽうで、^{ロフ}Şaqlāb スラブとよばれる ^{ロフ}Rūsīyah ルーシには、君主・王と呼んでもよい存在を認めていない。なお、わざわざ ^{ロフ}Fandur フランドル(首都は ^{ロフ}Alas アラス)の ^{ロフ}İvānūs 聖ヨハネ教会派をとりあげ、毎年夏至の日から三日三晩行われる^{ロフ}椋鳥とオリーブを用いた奇妙な祭を詳しく紹介している。

ヨーロッパの南方には、水銀と金の産出国として知られる ^{ロフ}Kastalūniyyah (Catalonia = ^{ロフ}Arahgūn アラゴン)の^{ロフ}王の国——^{ロフ}Falansīyah バレンシア、^{ロフ}Mursīyah ムルシア、^{ロフ}Mayūrkah マヨルカの三つの国からなる——があり、1262年に^{ロフ}カタルーニヤの^{ロフ}王がイベリア半島、バレアレス諸島、^{ロフ}Şiqīliyah シチリアをムスリムたちから奪取し、目下その税収は ^{ロフ}İsbāniyah の^{ロフ}王に与えられていること、シチリア島に定住していたムスリムたちを ^{ロフ}Lūcūrah ルーチェラの^{ロフ}都市に連行し、シチリアには代わりにキリスト教徒を送りこんだこと、ムスリムたちが ^{ロフ}Akkah アッコンを奪取しイーラーンの地でキリスト教徒たちが壊滅した^{ロフ}仕返しに、^{ロフ}件のシチリアのムスリムたちのうち約二十万の男子を殉教者として殺害したこと、^{ロフ}Ṭulaītulah トレドの^{ロフ}城市で最大の人口割合を占めるのはユダヤ人であること、^{ロフ}Burdugalah ポルトガルの王とイスパニアの王がしばしば戦争を繰り返していること、^{ロフ}Nafarah ナヴァッラの^{ロフ}王が北アフリカの君主たちと軍事同盟を結んでいることが報告される。^{ロフ}カタルーニヤと地を接する ^{ロフ}Burūvansā プロヴァンス地

方の東の Dulūza トゥールーズに大軍が常駐していること、Paris パリに医学や哲学を学ぶ約十万人の留学生が暮らしていることも附言される。

また、Ġanuvah ジェノヴァの君主がガレー船二百隻（毎隻三百人の兵士）を所有していること、Miṣr エジプト・Šām シリア・北アフリカ方面、Rūm ビザンツや Tabrīz（フレグ・ウルスの都）タブリーズに旅するフランク商人たちは、ここの海港から船出すること、この地域の東側に広がる草原地帯に22の大都市が点在するもの、目立った君主は存在しないこと、等が紹介される。脚高の脱^{トビチャク}必祭（西域の天馬）を産出する Rūmānīūlah ロマーニヤ、Mārkaḥ dī Tarafīs (Marca di Treviso トレヴィーソ辺境)、運河が縦横にめぐる海上都市 Fanīsīyah ヴェネツィア、Baṭurīq Akīliyā アキレイア、その北の Lunbardīyah ロンバルディア、Gütlāndīyah ゴットランディア、Sivīgīyah スイス、Dasīyah ダキア、Qūm クマン、Bulgār ブルガール諸国、ジョチの後裔ノガイがモンゴルの大軍とともに攻撃中の Māğarāstān マジャール人の住地、再び目を転じて、教皇の家たる Markadankūnā (Marca d'Ancona アンコーナ辺境)、Pātrīmūnīūdūsānpīr (Patrimonio du San Pietro 聖ピエトロの遺産)、Tūskānā トスカーナ、Bīzā ピーサ、Rūmīyah-yi kubrā ローマ、Kanbānīyah カムパーニアに筆が及ぶ。

第三部：『世系の分枝』（闕）

もとの姿を推測させる資料としてティムール朝の写本『(五)分枝』が伝わる。それによる限り、第一部と第二部の記述から系図に描いて各地域の歴代統治者たちを検索しやすくし、そのご知り得た情報によって微修正・加筆を施した系譜集である。

第四部：『諸国の諸道（と里至）』（闕）と『諸気候帯の様相』（闕）

世界を地理志と地図。プトレマイオス、七気候帯の区分をを踏まえた伝統的なアラビア文字の地理書——バルヒーの *Šuwar al-aqālīm* 『諸気候帯の様相』やイスタフリーの *Masālik wa mamālik* 『諸道と諸国』に近似する *Masālik al-mamālik (wa Masāfāt)* を書名に選ぶ。現物はいまのところ発見されていないが、第二部の『万国史』の各序文作製時に参照された資料群と深い関連性があることは間違いない。本書には、大元ウルス治下から取り寄せた当該地域の古今の方格地図や地誌、1290年8月21日にマラーガ司天台のクトゥブウッディーン・シーラーズィーがアルゲン・カンに献上した Rūm をはじめ西・北方面の邦土の多くを包括する「地中海および湾岸の図」⁽²⁰⁾ ——「ピーサ図」のようなコンパスを用いる *portolano* 海図で、“世界の西の4分の1の姿・形状を描出した *mappa mundi* 世界図⁽²¹⁾” とおそらく同じ——等の知識が反映されていた（じっさい第二部の「フランク史」が列挙する国名、地名は、1375年にアラゴン王国のベドロ四世がフランス国王シャルル五世のために製作させた「カタラン・アトラ

ス」のそれとよく一致する)。フレグ・ウルスを中心とした地域についても、ラシードゥッディーンの著作をしばしば引用するハムドゥッラー・ムスタウフィー・カズヴィーニーの *Nuzhat al-Qulūb* 『心神の娯楽』(1341年)の「(フレグ・ウルス) 地里図」と円形「世界図」からすれば、経緯度の数値に基づく方格図が製作されていた。その数値は、ナスィールウッディーン・トゥースィー等の *Zig-i Ilhānī* 『イル・カン暦』およびその観測成果を踏まえていたに違いない(マラーガや大都の司天台には地球儀が置かれていた)。フレグ・ウルス朝廷では、歴代君主のために、各地から得た最良の地図を合体した一枚ものの精緻な彩色世界図も製作されたと考えられる。ただ、アラビア文字の書物に収録される総図は、宗教的制約、軍事機密の秘匿の両面から、あえて *Safīnah-yi Tabrīz* 『タブリーズの翰墨全書』収録の「(簡略化による) 諸気候帯の様相」のように、直線、曲線、幾何学的図形を組み合わせた輪郭線で表現されたようだ。

3. モンゴルの世界認識——クビライが作らせた世界地図

ひるがえて大元ウルスでは、クビライの聖旨のもと、南宋接收十周年(1286)の記念事業の一環と銘打って、秘書監(≡科学技術庁)の漢児・蛮子の官僚が中心となり、新しい行政区画に基づく地理書『大元大一統志』の編纂が開始された。“旧大金領と旧南宋領の「知」の混一”が目的だったが、長官のジャマルウッディーンは、ながらく大モンゴル国の懸案だった“ユーラシアの東西の「知」の混一と対照表の作成”の実現に向け、暦・素材図鑑に続き、世界地図の製作も並行して進めた。かれの手下には、かつて出身地の学問都市ブハラやフレグ・ウルスのマラーガ天文台等で集めた地図コレクションのほか、直属の部下のイーサー(ネストリウス派キリスト教徒)がフレグ・ウルスから持ち帰った最新地図があった可能性が高い。アラビア文字の地図に、漢児・蛮子の官僚たちが南宋朝廷の旧藏品をはじめ各地の蒐集品を調査・補訂して作製した漢字の地図を合体させ、大モンゴルの広大な版図、古今東西の地理知識を一望できる一枚図を早急に呈示する。それによって、漢児・蛮子の官僚の華夷思想を打破しようとしたのである。西と東の世界は、1:1の割合で描出されたに違いない。

ただ、アッバース朝のムスリムが作製したアラビア文字の地図は、基本的にはブレマイオスの改訂版なのだが、事物の具体的な絵図化を避けるため、海岸線や河川・山岳・島嶼等を直線や幾何学図形に換えている(モロッコ出身のイドリースイーが1154年にシチリアのルッジェーロ二世に献上した世界図は、宗教的制約にとらわれず、キリスト教諸国の新情報や東南アジアから南中国にかけての大まかな知識も加えていたようだ)。漢字の地図も“天円地方”の思想によって、“中華”の地域を正方形

に描きたがる。そのため、“福建道の海を騙り行く船の回回毎”が所有する“海の道を知る回回文字のRāh-nāmāh 刺・那麻（航海指南書），“インド洋を往来する博識の船乗りたちのコンパスで測定した海図と指南書”，“*mappa mundi* と呼ばれる船乗りたちの世界図”，地球儀，天文観測による各地の経緯度表などによって補正する必要があった。また「天下地理総図」と仮称されたこの巨大な彩色地図は，宮殿内に展示するため，各地名に最低でもウイグル文字と漢字を，ことによるとアラビア文字も併記していた筈である。協力者のウイグル高官のアルクンサリ（Arqun-šāli/sariy）が尚書省や集賢院の仕事の懸けもちで時間がとれず，当初予定していた1年程度から遅延したが，音訳は機械的な作業であり，複数の訳吏で分担すれば負担は少なく，完成にはさほど時間を要しなかったと考えられる。

かたや『大元大一統志』は，開始から5年後にとりあえずの完成をみたが（全755巻），そのごも雲南，甘肅，遼陽等の地域の増補，校正，清書作業等が続き，1303年5月18日によく全1300巻，計600冊に整えられた。翌月，その巻頭にジャマルウッディーンが製作した「天下地理総図」を分載の形で収録することが決まった。地図は全葉，原図のとおりに彩色が施された。少なくとも2セット作製されて，中書省の兵部と秘書監が保管した。朝廷での展示が目的の「天下地理総図」——全体像の把握や一部の地名の暗記はできても，模写を許されない限り，複製は不可能——とは異なって，この大部の書物のほうは，部外者による閲覧自体が困難だった。

その状況が最初の編纂開始から六十干支が一巡した1347年2月1日に一変する。「この書は治国の用に最適ですが，やがて埋もれ散逸してしまうことが危惧されます。版木に刻んで印刷し後世に永く伝えられますように」との中書省の上奏を受け，恵宗トゴンテムルが聖旨を下したのである。国家出版事業はそれ自体が一大産業となっており雇用も生み出すため，天災が続くなか大部の書籍が特に歓迎された。そして何より，クビライ時代の繁栄を象徴する題名・内容の『大元大一統志』を刊行することによって，中央・地方の官僚たちの心をついにしたいという目論見があった。1349年に江浙等処行中書省下（江蘇・浙江省一帯）で公費を投じて出版され，松江府の儒学教授で蘇州出身の徐某（字は時之）が代表して朝廷に見本・献本を納めに行っている。その後，大元ウルス治下の路・府・州・県の官庁に頒布された。じっさい，イズィナ路（内モンゴル自治区カラホト）の城址から残葉が出土しているほか，1374年8月の時点で梧州府（広西 壮族自治区）の官庁にも1セット保管されていたらしい。駙馬国で遼陽等処および征東行中書省の管轄下にあった高麗王室でも参照できただろう。残念ながら『大元大一統志』は，『永楽大典』や『大明一統志』の編纂以降に散逸しはじめ，現在では端本しか伝来しないため，書中の地図を確認できない⁽²²⁾。

こんにち，“漢字で書かれた「アフロ・ユーラシア地図」の製作者”として知られ

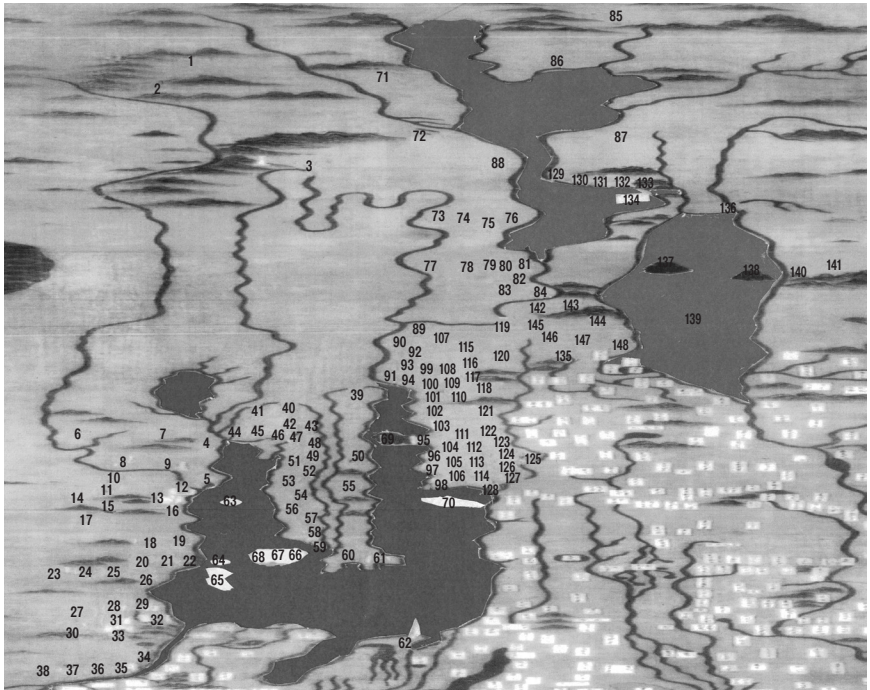
る蘇州の李沢民（字は汝霖^{あざな}）なる人物は、おそらく1360年代にこの『大元大一統志』の分載方格地図を再度貼り合わせ一枚図に復元したのだろう。大元ウルス治下の地名はそのこの行政区画の変化に従って適宜修正した。ただ白黒印刷であったため、「声教広被図」（「声教被化図」）なる新商品として売り出す際に、自身で彩色を施さねばならず、多くの塗り間違いを犯した。だからこそ、かれの世界地図を土台にしたものは、朝鮮王朝で製作された「混一疆理歴代国都之図」（龍谷大学附属図書館、長崎本光寺）、「大明国地図」（熊本本妙寺）、「大明国図」（天理大学附属図書館）であれ、洪武帝が製作させた「大明混一図」（中国第一歴史档案館）であれ⁽²³⁾、一律に地中海や黒海が消失し、アフリカに巨大な湖が出現しているのだ。しかし見方を変えれば、これらの地図に描かれている西方の世界は、縮尺はともかくジャマルウッディーン製作の「天下地理総図」のそれに他ならないのだから、大元ウルスのフランク諸国に関する知識を具体的に知り得る貴重な資料といえる。

「大明混一図」は1389年に製作された。クビライの後裔のトクズテムル・カンが殺害され大元ウルスからの王朝交代がひとまず確固たるものになったと宣言してよい状況になったからである。この地図の製作自体が祝賀記念の一環だった可能性が高い。皇帝の執務室壁面に合わせるために、原図を拡大せねばならなかったが、それによって目立ってしまうユーラシアの東西の繋ぎ目——「畏吾兒別失八里^{ウイグルベシバリク}の田地の西は西域と接す」とある——の空白地帯を埋めるために、同じ地名を何度も並べる誤魔化しが行われた。しかも中央アジア以西の地名については、モンゴル時代の情報のまま放置されている。600年代初頭に著しい退色・両端などの破損のため新調されたが、模写の上に新しい情報——朝鮮半島、日本、マレー半島を追加した。その代償で中央アジア以西が圧縮され歪んでしまったと見られるが、洪武帝の時点で『元史』編纂の方針と同様、西方を可能な限り圧縮していた可能性もある。まもなく新しい「大明混一図」は、大清満洲国^{ダイチンマンジュグルン}の所有に帰し、皇帝、王子たちの教材とするために、各漢字の地名の上に満洲文字による音訳、解説文には翻訳の附箋が貼り付けられた。のちに表装をやり直したのか、イベリア半島の西端と日本列島の東端が断ち切られている。朝鮮王朝では、1402年以降、朝鮮半島・日本・大明の情報を最新に改めるため何度も模写を繰り返したが、「大明混一図」はおそらく一回の模写しか経ておらず、李沢民の地図の状態に近いと考えられる。じっさい、一連の地図を比較してみると、「大明混一図」は誤字脱字が少なく情報量も多い【表1】⁽²⁴⁾。

ひるがえって、大明末期の羅洪先『広輿図』（木版印刷）に収録される「（東・西）南海夷図」は「声教広被図」の下半分の輪郭だが、西方と東方の割合が1：2となっている。朝鮮王朝製作の一連の地図も同様である。ところが「大明混一図」では西方は更に1：7に圧縮、逆に南北方向には2倍近く引き延ばされている。これをジャマー

ルッディーンの「天下地理総図」のほんらいの形すなわち——東西を4倍、南北を1/2倍に調整、地名解説から塗り間違いと考えられる部分を加工修正すると【図2】のようになる。出現した地中海、黒海、カスピ海の海岸線、島名はそれなりに正確である（アドリア海・エーゲ海・マルマラ海が消失し、パンゲア大陸のごとくバルカン半島ギリシア湾岸にアナトリアが嵌った結果、地名が混在してしまっているが）。黒海、カスピ海が傾くのは、計測された経緯度に従い球面を平面に表わそうとしたためである。ジョチ・ウルスの情報は少ないが、軍事・貿易の重要拠点として重視されていたクリミア半島のケルソンヤスタクの地名が目を惹く。

アレクサンドリアの灯台を描くことから推測されるように、イドリースイーないシベリア半島のアラビア語資料を基盤とし、イベリア半島やフランクの王侯たちの分布もそれなりに知っていた。しかし『集史』の「フランク史」が Išbāniyā の代表的な都市として挙げた Šatībah (Játiva) や Azārqudrah は見当たらない。バルト海の沿岸の国々、アイルランド、イングランドも描かれていない。長靴状のイタリア半島は



【図2】「大明混一図」から復元した「天下地理総図」のヨーロッパ

中央に山脈が走り、24もの地名が記載されるが、多くは比定が困難である。そのなかで、大都市を示す丸枠にローマ、その傍らに教皇庁の意識と思しき「天丁戸（天にお仕えする者たちの家）」を記す点は、注目してよい【表1※3】。またヨーロッパ中央部の“烏思達”がポーランドの Wahlstatt、別失八里、八不魯阿不仮と同格以上の特別な円印【表1※4】を附した“昔充那■■■ Si-cung-na-wei-sa”がハンガリーの Stuhlweissenburg だとすれば、バトゥの遠征軍の記憶——モンゴル兵の埋葬墓地として表記されているのかもしれない。プラーノ・カルピニのジョヴァンニの報告書の“フンガリアで殺された者の墓地”が想起される。

1300年以前の知識しか反映されていないという事実は、「声教広被図」が1286年の「天下地理総図」の姿に近いことを裏付ける。大元ウルス治下の行政単位の名称の変化やフレグ・ウルスの協力等による西方の知識の増加に伴い、1303年以降に「天下地理総図」自体が改訂されていた可能性は高いものの、伝来しない。残念である。

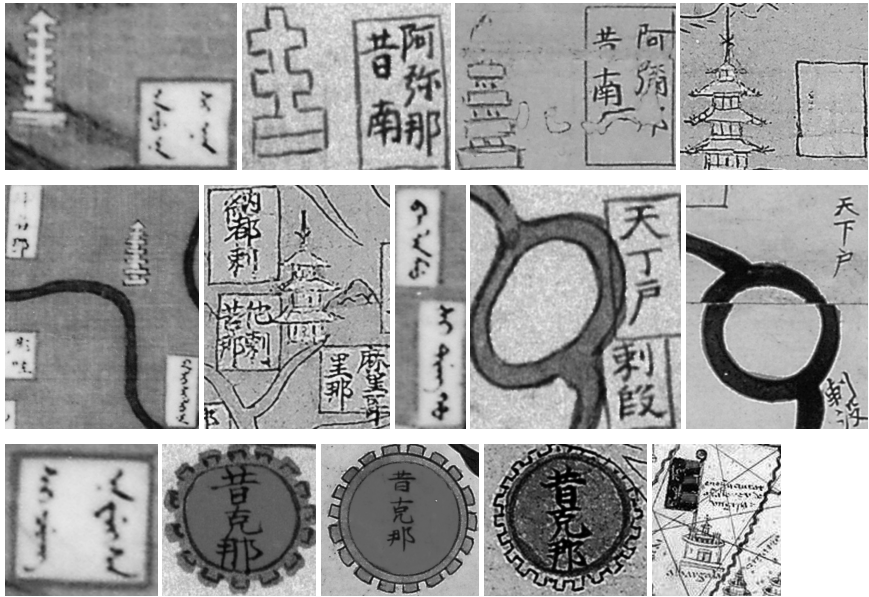
【表1】ヨーロッパ地名対照表

	第一歴史档案館	龍谷大学	本光寺	本妙寺	備考
1	阿魯滿尼阿	阿魯尼阿	阿魯尼阿	阿魯尼耶	Alāmāniyyah=Allemagne
2	Fa-[li/lan]-si-na	法里昔	法里昔	法里昔	法里昔耶 Belgica=Belguie/ 法蘭昔耶 Faransiyah=France/Paris
3	塔の絵 A-fu-na-si-nan	塔の絵 阿彌那昔南	塔の絵 阿彌那昔南	塔の絵	Amiens/Arleanne/阿彌那昔南 Lusignan/阿彌那昔南 Afrasiyyah=France/Auvergne/Avignon=Avinyo※1
		愛奴			Aquitaine
4	Mu-ni-ku		汲里若	汲里苦	Monaco
5	Ma-li-si-li-na	麻里昔里那	麻里昔里那	麻里哥里那	麻里昔里那 Marseille=Marsela
6	阿刺只刺	阿刺只刺	阿刺只刺	阿刺只刺	al-gazīrat 半島=Bretagne/Anger/Angoulême/阿刺号刺=Aragon
7	na??	納都刺	納都刺	納都刺	納都刺 Narbonne/訥都刺 Tulušah=Toulouse/Tutilah=Tudela
8	捍者那	捍渚那	捍者那	捍者那	Bagūnah=Bayonne
9	塔の絵			塔の絵	Qarqašūnah=Carcassonne/Haikal al-zahrat=TemplūVeneris※2
イベリア半島 Andalus					
10	那哇兒			那哇兒	Navarra
11	Gi-san-alin 鷄山の山 (滿洲語音訳+意訳)	鷄山	鷄山	崑崙山	
12	Ta-la-ku-na	他里苦那	他刺若那	他刺苦那	Tarrakūnah=Tarragona
13	Bai-bu-na	拜不那	拜不那	拜不那	拜不魯那 Banbulūnah
14	哈赤				
15	?者那			?者那	捍者魯那 Barcellona
16	捍刺細那	捍刺細那	捍刺初那	捍刺細那	捍刺細耶 Balansiyah=Valencia
17	柁のみ				
18	Tan-i-la	嘆戈刺	嘆戈刺		嘆伐刺 Talabera
				嘆哇兒	Tabarqah
19	Fa-ss-ba-ga	法思八哈	法思八哈	法思八哈	Fahş al-Ballūt=Los Pedrches
20	Fa-li-ba-ga	法里八哈	法里八哈	法	
21	Te-na	忒那	忒那	忒那	Ténès

22	Da-ni-ye	答你也	哈你也	答你也	Dāniyah = Dénia
23	Ga-ss				Kastalūniyyah
		哈刺刺里	哈刺刺兒	粹のみ	哈思刺里耶 Qastīliyah
		合里渴	合里渴	粹のみ	Galiqa = Galicia
			刺合沙		Cabo da Loqa
			合惠安		Coimbra
24	Fa-la-to	法刺陀	法刺它		Valladolid / Porto
25	San-či-la		交刺		Santiyāqū = Santiago de Compostela
26	Mu-al			粹のみ	Muršiyah = Murcia
27	I-ss-ban-da-la	亦思般打刺	亦思般打刺	粹のみ	Išpān-? / Azārquadrah
		刺可撒布魯	刺可撒布兒	刺可撒??	Lisbon / Lagos & Satuval
28	Ga-la-ba-ss	哈刺八思	哈刺八思	哈刺??	Qara't rabah / Qurtūba
		哈刺八里			
29	Mu-li-ga	没里哈	投里哈	没里?	投里答 Tulīṭalah = Toledé
			麻兒	麻?	Maryyah
30	I-ss-ban-di-ya	亦思般的耶	亦思般的耶	亦思般的耶	Išpāniyah < Išbīliyah = Sevilla = Sibiia
		撒刺	撒刺	撒刺	Salamanque ?
			賽那若	賽那若	Saraqustah = Saragoça / Sağubia
31	Au-na-to	粵那它	粵那它	奧那它	Ġurnātah = Grenade
32	Na-ta-ga-na	那答哈那	那答哈那	? 答? 那	邦答哈那 Badajos
33	Ma-sa-ss-la			麻撒哈刺	Mañanares
34	Ma-ka-al	麻可兒	麻可兒	麻可兒	麻兒可 Málaga = Malicha
35	Je-li-ga-la-si-a	這里哈刺細尼	這里哈刺細兒	這里哈刺里	這不里哈刺細兒 Ġabal al-šarrāt
36	Ma-lu-li		麻六里	麻六里	麻八里 Marbella
37	Je-bu-li-fa	這不里法	這不里法	這不里刺	這不里刺法 Ġabal al-Faṭḥ = Gibraltar
38	Da-bu-lu		達普魯	達普魯	達(普)魯 Tāriq
		刺地它刺	刺巴它刺	刺地??	Gibraltar / Burdugalah = Portugal
イタリア半島					
39	Ta-ss-na	他里那	他思那		他里非 Tarifis = Toreviso / 他思合那 Tūskānah
40	To-la-mu-la				Tarmala / Talamone
41	Fa-nu-na				Ġanuwah = Genova
42	Bu-du-na				Badna
43	Ba-ni				Fanīsiyah = Venecia
44	Nai-ni-na	妳你那	妳你那	妳你那	始佻那 Siena
45	Ma-lu	麻魯	麻魯	麻魯	malf = Amalfi / Marca. di...
46	Ka-mi-ga				弥→拊 Capua
47	Na-bu-li				Nābul = Napols
48	Di-ss				Biša = Pisa
49	Ba-lan				Firenze
50	La-la-dai	刺刺歹	刺刺歹		Ferrara / L'Aquila / Barletta
51	Ba-la-mu	刺没	刺没		Harūmah = Rome ※ 3
52	Ši-ding-ho 失丁戸	天丁戸	天下戸		天丁戸→天にお仕える者たちの家 Civeta Veya = Vatican 教皇庁 ※ 3
53	Ba-ni-fa	八里法	八你法		Benebent
54	To-li-to	它里秃	它里秃		Toronto
55	Ga-la-ba-i-nu	哈刺八以奴	哈刺八以奴		哈刺八利 Qalavriyah = Calabria
56	Ga-la-na	哈刺那	哈刺那		Calone
57	Nu-la	奴刺	奴刺		Cerignola
58	Ko-du	渴都	渴都		Kutruna
59	Li-nu	里奴	里奴		Regiu = Reggio / Renna
60	Ni-san-ka-lo-al	你撒者羅兒			你者撒羅兒 Nigītira
61	Man-fa-li-na	滿法里那	滿法里那		Manfredonia / 滿法里耶 Manduria

地中海～エーゲ海					
62	塔の絵	塔の絵	塔の絵	塔の絵	アレクサンドリアの塔台
63	湖に塗り間違えた島				島(形のみ) Qursiqah = Corsica
64	撒哈里那		撒哈里那	撒哈里那	撒里答那 Sardānīyah = Sardaigne
65	湖に塗り間違えた島				島(形のみ) Ibisah, Māyurqa, Minrūqah = Baléarese
66	Mo-li-di		莫里的	莫里的	Mālat
67	Fa-li-sang		法里桑	法里桑	法里密 Palermo / Baléarese
68	Bei-sa-di		???	薛撒的	薛撒的 Siqīlīyah = Sicilia
69	Na-ka-li-na	那可里那	那可里那		耶可里都 Iqrītuš = Kulete
70	湖に塗り間違えた島		湖に塗り間違えた島		島(形のみ) Qubrūš = Qipros
東ヨーロッパ・バルカン・アナトリア					
71	U-s-da	烏思達	烏思達	烏??	← Wahlstatt ?
72	Si-čung-na-wei-sa 普充那 ■	普克那	普克那	普克那	Stuhlweissenburg = Albargala ? ※ 4
73	Sa-ba	撒八	撒八	撒八	Zagrabia = Zagleb
74	Dung-bu-la 東不刺	東大刺	車大刺	車大刺	Zadar / Dubrovnik
75	Jen-ni-gu 丁尼古	上尼古	上尼古	上尼古	Sebenico
76	La-to-ba	刺它八	刺它八	刺它八	沒刺它八 Moldova
77	Niye-gu-man-di	捏古滿的	捍古浦的	捍古滿的	滿的捏古 Montenegro
78	Ha-la-han-du	哈刺行都	哈刺行都	哈刺行都	哈刺行部 Calasebes
79	Naye-gu 捏	捍古	捍古	捍古	Nicopoli
80	Gū-lu-su	忽魯速	忽魯速	忽魯速	Cluj
81	Su-du			速都	速部 Sophia
82	Sin-šu	信首	信省	信省	
83	Fu-na	福那		福那	Foçşani
84	[Ka/Ča]-nu-ss			部勿思	部忽■思 Bucurest
			淡竹那		澁你那 Janina
			撒都尼几		Šalunīqī = Saloniki
			泊■几■		
			十■		
85	U-na-ku-bei	兀那忽地	凡那忽地	兀那忽把	Cracovia / 兀那把 Kuyābiya = Kiev
86	Či-bin-u-al 赤■兀兒				赤■刺兀兒 Ibrāul = Braila
87	Ša-si-bu-lu	沙天普魯	沙天普魯	?? 普魯	Sizubuli = Sisopoli
88	Gu-ss - tan-si-na	骨思嘆普那	骨思嘆普那	骨思嘆普那	Quştañnīyah = Costantinople
89	Či-fu-ke-ke	齊補阿可	齊福阿可		čibūk / 安梯阿可 Antioche
90	A-li-ni-ya	阿里牙	阿里牙	阿里你牙	Alanya / Albania
91	Ša-seng-ss-li-na	沙生里那	沙生里里那	沙生■里那	Sesmir = Ismir
92	A-ke-li-ya	阿揭里牙	阿渴里牙	阿渴里牙	Achaia / Ankūliyah
93	A-ge-sa-la	阿合撒那	阿合撒那	阿合撒那	阿合撒刺 Aqşarā
94	Ho-bi-su-na	合名速那	合必速那	合必速那	Calbis
		阿法	阿法		Efesus
			那思哈里那	■哈里那	那思■答里耶 Iskandarūyah
95	A-su-u-mu	阿速烏奴	阿速烏沒		Aegeum
96	Ma-ke-li	馬揭里	馬揭里	馬揭里	Macre = Fethiye
97	Bi-yin 薛因	薛因	薛因	薛因	Sechin = Sessin
98	I-ss-ta-ss-hū	亦思它里忽	亦里它里忽	亦思它里忽	Scutari
99	A-lang	阿郎	阿郎	阿	Harān
		赤細八兒	赤細八兒	赤細八兒	赤細八兒 Ispartah
100	Tai-al-li-na 台兒里那				合兒黑里耶 Heraclea ?
101	I-sa-li-ku				Isnik
102	A-fo-na			阿仏那	阿低那 Adenah

103	Fu-to-li-na	補它里那	福它里那	補尼里那	福它黑耶 Burdūkiyah
104	An-je-jauu-na	俺它超那	俺它超那		俺它起耶 Anṭākiyā
105	Te-mu-al	忒木兒	忒木兒	忒等兒	Termes
106	Ke-li-jauu	可里交	可里交	可里交	Cilicia
107	Ša-lo-ho	沙樂河	沙樂呵	沙樂兒	Šahrah
108	Geyoo-fa-li-na	交法里那	交法里那	交法里那	Kafarinā
		達八里渚	達八里渚		Tavālis / Divriği
109	Fu-ni-na	福你那	福你那	福■那	福你那 Qūniyah
110	Kun?-ba-li-ku				Gün-baliq
111	Si-ss-wa	細思哇	細思哇	細思哇	細哇思 Sivās
112	Nai-ye	妳葉	妳葉	妳葉	Niqiyah = Nicaea
113	A-ye-ni-ye	阿也里也	阿也里也	阿也尼也	阿他尼也 Atīniya = Athene = Atines
114	A-lu-ma-li-ye	阿魯麻里也	阿魯麻里也	阿魯麻里	Arminiyah = Armenia
115	Gi-li 吉利		吉乃	吉刀	Kīrsahr
116	Kai-sa-li-na	蓋撒里那	蓋撒里那	蓋撒里那	蓋撒里耶 Qaisariyah
117	A-ha-su-bi	阿合蘇必	阿合蘇必	阿合蘇必	Aqšahr
118	A-la-sa-gang	阿刺撒岡	阿刺撒岡	阿刺撒岡	Arzangān = Erzincan
119	Gu-ss				Ğuzz
120	Ku-su	渴蘇	渴蘇	渴蘇	Kars
121	Liang-li-li-na				Liarisia
122	Ma-ku-tu-ni	麻渴度尼	麻渴度尼	麻渴度里	Māqadūniyā = Macedonia
123	Ta-ta-ku	他他古	他苦	他々古	Targos / 他巴古 Tobacusta
		美里里那	美里里那		美思思耶 Mišīšh = Misis
124	A-yang-ča	阿陽叉	阿陽叉	阿陽叉	Aınzarbah
125	An-da-li-ye	俺打里也	俺■也	俺打里也	Anṭāliyah = Adalia
126	Sa-ga-da	撒正打	撒正打	撒正打	撒巴打 Sabartā = Sparta
127	Ha-li-a	哈利阿	哈利阿		哈利地阿 Qalūdiyā
128	Di-su-fei		的刺非	的刺非	Delphi
クリミア半島					
129	Ko[lir]-sun	曲孫	??	曲孫	Cherson
130	Bu-ča	普茶	??	普茶	魯答 Lusta
131	Čei-gi-na	赤吉那	???	赤吉那	Činalari / Čembano
132	Su-da-ku	速達里	速達里	速達里	速達黑 Sūdāq = Sodaya
133	Fa-si	法失	法失	法失	怯失 Kerch / 怯夫 kaffa
134	Hū-da-di-ss	忽達的里	忽達的里	????	Chabardi / Tana
135	Sa-bu-sa-we-ho-ni	薛花普干	薛■普	薛花普	Savastopoli
カスピ海周辺					
136	Bei-sa-al	北撒兒	北撒兒	北撒兒	Batu Sarai or Berke Sarai ? / 亦徹兒 Itil
137	Mederi-tun 海の島 (滿州語訳)	海島	海島	海島	
138	Mederi-tun 海の島	海島	海島	海島	
139	I-lu-wan	久六湾	久六湾	久六湾	失六湾 Širvān
140	Bei-su	北速	北速	北速	
141	Heišan-alin (滿州語: 音訳 + 意訳)	黑山	黑山	黑兒	Ġabar siyā, Siyā-kūh
142	Ha-nan-a	哈刺阿		哈難阿	
143	Jan-hū-lu	瞻胡魯	瞻胡魯	瞻胡魯	Šamkūr = Šamehor
144	Ba-bu-du-a-bu-ni	八不督阿不你	八不督阿不你	不督阿不你	八不魯阿不偵 Bāb al-Abwāb = Darband 鉄門
145	Ti-di-al	剔的兒		剔的兒	剔付兒 Tifur = Tiflis = Tbilisi
146	Biye-da-u				Bištay / Partaw
147	Bei-lo-si				
148	Hūwa-li-da 花里達	花思達	花■達	? 里 ?	Vaštān



【表1 補足図】

上段：※1 中段：※2・※3 下段：※4

「大明混一図」では、重要な地方・地名は正方形枠で記される（表のゴシック体表示のもの）。

註

- (1) 当時、漢語ではこの行政府を“行尚書省”と呼びなした。“行”は“派出所”、“支部”の謂いで、“尚書省”は“財務省”——ペルシア語の *divān* に相当する。モンゴル語にはこの機関を表現し得る適当な語が無く、ウイグル、契丹、女真官僚を通じて漢語の“省 *shǐng*”を借用するようになる。
- (2) 1247年にドミニコ会修道士サン・カンタンのシモンが面会したバイジュ、バイジュの後任でフランク国王ルイ9世に書簡を送ったエルジギデイ等。
- (3) フレグがトクズを娶ったのは西征が決定して以降のこととされるが、トルイの逝去から相当の年数が経過している。その場合、トルイの正后でモンケたち兄弟の母だったソルコクタニ・ベキの宮帳で暮らしていたか、アリクブケがいったん収継していたと考えざるを得ない。
- (4) 宮紀子「東から西への旅人：常德——劉郁『西使記』より」（窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図』総合地球環境学研究所 2010年 pp.167-190. のち『モンゴル時代の「知」の東西（下）』名古屋大学出版会 2018年に収録）、同「モンゴル時代史鶏肋抄（15）ヨーロッパからの輸入品、（16）天翔ける駿馬」（『究』No.138・139ミネルヴァ書房 2022年9・10月 pp.40-43.）。
- (5) 劉郁「西使記」と情報源を同じくする『元史』卷一四九「郭侃伝」（≒関復「大元修郭令公廟碑并第十九代孫奉訓大夫故知寧海州郭侃碑」）によれば、フレグは、アッバース朝を降服させた

- 1258年の時点では、郭侃に“西のかた海を渡り^{フランク}富浪を取める”よう命じていたらしい。
- (6) 『秋澗先生大全文集』巻九十五『玉堂嘉話(三)』は、宋克温の説“回鶻は今の^{フイグル}外五、回紇は今の回回”を引いており、アラビア方面のムスリム、ユダヤ、ネストリウス派キリスト教徒等を指すことがわかる。
- (7) 虞集『道園学古録』巻二十一『御馬五雲驥図』の賛によれば、至順二年(1331)夏に上都で文宗トクテムルが自身の最上の神駿を宮廷の画師に描写させ、虞集等に賛を附させている。ちょうどこの頃に当地を訪れた地方官僚の唐元も、『筠軒集』巻七『私郎国献天馬』にて“西戎献馬大明宮，九尺頭昂立朔風。身邊黑雲蹄踐雪，眼明紫電骨如龍。圉人飭豆須三品，明月当盧映兩駿。雉貢越裳周道盛，歛歌重見入居庸”と詠う。Eの記事と混同してはならない。
- (8) 1336年に恵宗トグテムルが教皇ベネディクト12世に宛てた国書(ラテン語訳)の冒頭に、“ad Papam, Dominum Christianorum in Franchiam ultra septem maria, ubi sol occidit”とある。アラビアの地理書・地図の表現から影響をうけたと考えられるが、Bの“二つの海”から大幅増加している。銅銭の寸法の拡大、カンたちの上になつた大カン=カアンのはずなのに“大カアン”なる表現が出現するのとはほぼ同時期の現象である。R.P.F.L.Waddingo Hiberno, *Annales Minorum seu Trium Ordinum as Francisco Institutorum*, VII, 1733, p.209.
- (9) フランク国産の天馬と絵図の話題は、さほど時をおかず揚子江以南にも伝わり、類似の絵図も製作されて流通した。烏斯道をはじめ詩歌の形で記録を遺した人々の論調は、朝廷の文官とはほぼ同じである。後述の李沢民の世界地図——「声教広被図」を見ていた地域・階層と重なっており、フランクが何処にあるのか確認することができたはずである。張憲『玉筍集』巻十「天馬(二首)」、郭翼『林外野言』巻下(顧瑛『草堂雅集』巻九)「天馬(二首)」,「和李長吉馬詩廿三首」、陸仁『乾乾居士集』(『草堂雅集』巻十三)「天馬歌」、楊維禎『鉄崖古楽府』巻七「私郎国進天馬歌」、補卷四「私郎国新貢天馬歌」、管時敏『蛭發集』巻五「敬賦天馬歌」、凌雲翰『柘軒集』巻三「陳居中進馬図」、烏斯道『春草齋詩集』巻二「陳中復先生所画馬輞贈吳生好徳」、丁鶴年詩集』巻二「題弗郎天馬図」、王逢『梧溪集』巻三「敬題汪氏天馬図」等。なお、郭鉉は『静思集』巻一「題追風図」、巻七「和虞学士春興八首」において、“^{フランク}拂狼”の漢字表記を選ぶ。
- (10) 実際には大元ウルスは大都からモンゴル高原に一時的に退去していたに過ぎず、雲南や高麗も大元の宣布した“元号”を使用し続けていた。
- (11) 宮紀子「モンゴルが遺した『翻訳』言語——旧本『老乞大』の発見によせて——(上)」(『内陸アジア言語の研究』18 2003年 pp.53-96. のち『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会 2006年に収録。)参照。Gāmi' al-Tawārīḥ, MS: Rampur, Raza Library, 2015, p.60. MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan1518, f.174b-175a. “当時、君主たちが言う言葉は何であれ、日々筆録されるという慣習があり、かれらが宣した諸言辞の大部分は駢文なので、各君主は側近たちの中から一人を自身の諸言の筆録のために任命なされていた。チャガタイのそれについては既述の[^{キタイ}漢兒]ヴァジュラ(オチル)が筆録し、カアン(太宗オゴデイ)にはウイグル出身でチンカイという名の書記官がいた。ある日、[カアンが]チャガタイに「汝のヴァジュラのほうが優秀か?それとも朕のが優秀か」と問うた。チャガタイは「間違ひなくチンカイのほうが優秀でしょう」と答えた。後日、宴会において、二人の兄弟はそれぞれ訓言の詞を述べ続けた。ヴァジュ

ラは暗記して筆録すべく退出した。カアンとチャガタイは二人とも暗記しており、ヴァジュラがそのとおりに書き出せられるか、否か、試験してみた。その筆写に没頭している最中に、モンケ・カアンが通りかかり、ヴァジュラに話しかけた。ヴァジュラは言った。「聞き取ったことを筆写し終わるまで私は荷立っています」。持参してお二方が検閲すると、単語の前後の入れ替えを除いて、まさにそのとおりに書いてあり、全部記憶していた…」。

- (12) 後述する『経世大典』の「政典」《征伐》で言及される諸国と重なり合う。
- (13) こんにち知られているのは、清朝末期の魏源が『永楽大典』所収の「経世大典地理図」（永楽帝が対峙していたティムール朝がフレグ・ウルスの後継王朝であることが注記されている）に多少手を加えつつ自著の『海国図志』に収録したもの。もとの地図は、『元史』卷六十三「地理志・西北地附録」の編纂時にも利用された。フレグ・ウルス以西にマムルーク朝の“迷思耳（カイロ）”と“迷失吉（ダマスカス）”，ビザンツの“吉思丹答你牙（コンスタンティノープル）”が記されている。
- (14) 『国朝文類』卷四十一「雑著・礼典総序」《朝貢》。
- (15) 諸国の国主の名、国土の広さ、都市の名、大都・上都までの距離、人々の風俗、衣服、珍獸等について聴取、使節の外見、衣服、献上品を写生する。『元史』卷十五「世祖本紀」[至元二十五年三月己亥]、『秘書監志』卷五「秘書庫・職貢図」。
- (16) 『大明太祖高皇帝実録』卷六十七「洪武四年八月癸卯（1371年10月2日）」、『大明太祖皇帝御製集』卷二「諭弘祿国詔洪武四年八月」に“おしなべて四夷諸国はみな使いを派遣してきているのに、汝、弘祿国（ビザンツ？）——隔絶した西夷だけがまだ挨拶に来ていない。いま、嘗て汝の国の人民だった某人（^{ネウクルン}捏古倫く Nicolo）を派遣し、詔を携え論しにゆかせる”との洪武帝のことばが記される。
- (17) *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, MS: Paris, BnF, suppl. persan 1113 は Gallica で、*Diez Album*, Fo1-70-73 は Staatsbibliothek zu Berlin のサイトで全冊閲覧可能。 *Jamiut Tawarikh*, Rampur Laza Library, 2015, はカラー影印。
- (18) フランク諸国からの情報は、農業・土木・鉱物・宝石・香水等の指南書であるラシードウツディーンの『踪跡と生物』（『踪跡と消息』）、アブーアルカースィム・カーシャーニーの『寶貝の花嫁と芳香の珠玉』にも反映されている。
- (19) *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Hazine 1654, MS: Istanbul, Hazine 1653, K.Jahn, *Die Frankengeschichte des Rašīd ad-Dīn*, Wien, Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1977, 宮紀子「モンゴル時代史鶏肋抄（14）ヨーロッパの権力者たち」『究』No.137, 2022年8月, pp.40-43.
- (20) *Ġāmi' al-Tawārīḥ*, MS: Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan 1518, f.266a, MS: Paris, BnF, suppl. persan 209, f.327b.
- (21) *Die des Frankengeschichte Rašīd ad-Dīn*, tafel 7.
- (22) 『秘書監志』卷四「纂修」、許有壬『至正集』卷三十五「大一統志序」、危素『説学齋稿』卷三「送徐時之還句吳序己丑」、朱存理『珊瑚木難』卷二「贈曇霄」
- (23) これらの地図については、2003～07年の京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グ

ローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」（代表：藤井譲治・金田章裕・杉山正明）によって初めて総合的な調査がなされた。国内所蔵の4点のうち3点は、各所蔵機関の許可のもとに高精度の写真撮影・管理し、それらの対校により西側世界の地名の解説案も提示された。「大明混一図」は原寸大の複製を購入したが（地理学研究室蔵、分割写真の製本は文学部図書館蔵）、諸事情により分析作業が実施されないままとなっていた。研究分担者に名を連ねた者の責務として、今回の研究発表の要請（2021年）を機に分析・解説を試みることにした。ヨーロッパ以外の地名については別の機会に公開したい。『NHKスペシャル 文明の道⑤モンゴル帝国』（NHK出版社 2004年）、藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』（京都大学大学院文学研究科 2004年）、同編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』（京都大学出版会 2007年）、宮紀子「『混一疆理歴代国都之図』への道」（『絵図・地図からみた世界像』のち『モンゴル時代の出版文化』収録）、同『モンゴル帝国が生んだ世界図』（日本経済新聞出版社 2007年）、同『モンゴル時代の「知」の東西（上）（下）』（名古屋大学出版会 2018年）、宮紀子著・王談談訳『蒙古時代の天象図・輿図及其流播日本』（黒田智・陳小法編『中日文化交流史叢書⑤』人民出版社 2024年刊行予定）、同「モンゴル時代史鶏肋抄（12）新異なるアフリカ（13）描かれたヨーロッパ」『究』No.135・136、2022年6・7月、pp.40-43。

- (24) 『プトレマイオス世界図』（岩波書店 1978年）、H.Mžik, *Al-İşṭahrī und seine Landkarten im Buch "Şūwar al-Aḳālīm": nach der Pers.Handschrift Cod.mixt. 344 der Österreichischen Nationalbibliothek*, Wien, Georg Prachner Verlag, 1965, Ibn Hawqal/ J.H.Kramers & G.Wiet(trad), *La Configuration de la Terre (Kitab surat al-ard)*, Tome.1, Paris, Maisonneuve et Larose, 2001, Muḥammad al-Idrīsī, *Opus Geographicum : sive "Liber ad eorum delectationem qui terras peragrarare studeant"*, 9 vols, Instituto Universitario Orientale di Napoli, 1970-84, K.Miller, *Carta Rođeriana: Weltkarte des Idrisi vom Jahr 1154 n.ch*, 1928, Edrīsī/ R.Dozy & M.J.de Goeje(trad), *Description de l'Afrique et de l'Espagne*, Leiden, 1968, Naṣīr al-Dīn Ṭūsī, *Ziğ-i İlḫānī*, MS: Paris, BnF, suppl.persan 163, f.60a, MS: Staatsbibliothek zu Berlin, Sprenger 1853, f.84b, Ibn Bībī, A.S.Erzi(ed), *El-Evāmīrül-'Alā'iyye ft'l-Umūri'l-'Alā'iyye*, Ankara, 1956, M.S.Reinaud, *Géographie d'Aboulféda*, Tome II, 1-2, Paris, Imprimerie Nationale, 1848・1883, Hamd Allāh Mustaufi Qazvīnī, *Kitāb Nuzhat al-Qulūb*, MS: Paris, BNF, Ancien fonds.139, G.le Strange (tr), *The Geographical part of the Nuzhat al-Qulūb*, E.J.Brill, 1919, Šihāb al-Dīn 'Abd allāh Ḥwāfi/ Ş.Sağğādī(ed), *Ğuğrafiya-yi Ḥāfiż Abrū*, Tihrān, Vonyān, 1997, M.J.A.C.Buchon & J.Tastu, *Notice d'un Atlas Langue Catalane*, Manuscit de l'an 1375, Paris, Imprimerie Royale, 1839, И.К.Фоменко, *Образ мира на старинных портланах: Причерноморье. Конец XIII-XIV в.*, Москва, Индрик, 2011, 杉山正明「東西の世界図が語る人類最初の大地平」（『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』pp.54-83）、N.Kenzheakhmet, *Eurasian Historical Geography*, Gossenberg, Ostasien Verlag, 2021.

【附記】本稿は、京都大学教育研究振興財団研究活動推進助成「多言語文献・図像・文物資料による『元史』本紀と『明実録』の再検証」（2022年7月～23年3月）、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「多言語文献と図像・文物資料で読み解くモンゴル時代の「知」の革新・創生と伝播・継承」（2023年4月～27年3月）による研究成果の一部である。